

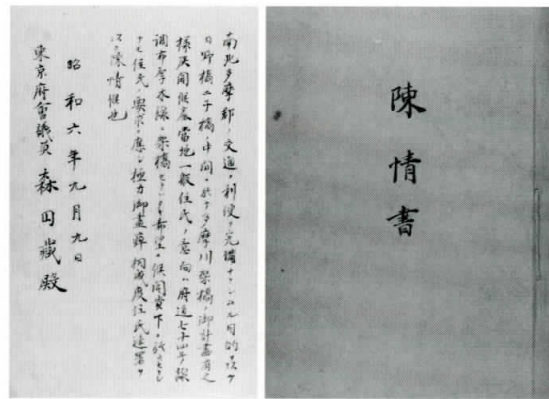
ってからのことです。昭和6年7月に調布町の原雄一町長が稲城村の榎本儀兵衛村長を訪ねて、多摩川への架橋について賛同を求め、その帰途当時の府会議員であった森田蔵氏を訪ねて東京府会の意向を聴取しています。しかし昭和5年に川崎街道の是政渡船場に架橋する議員建議案は決議されましたが、調布稲城間の多摩川への架橋は困難とされました。以後関係各方面との折衝が重ねられ、昭和6年9月には、稲城村民41名が署名した陳情書が東京府会郡部会議所に提出され、運動は急速に盛り上がりました。同年12月の東京府会では、調布町・稲城村の有志が多数傍聴し、流血の惨事さへ起こりそうな情勢でしたが、幸いに混乱なく多摩川原橋架設案は可決され、架橋費及び取付道路費の総予算39万7500円と3か年継続事業が確定しました。

昭和8（1933）年より地質調査が開始され、翌昭和9年からは、稲城・調布両方面の取付け道路工事が始まりました。橋梁工事は昭和9（1934）年8月から昭和10年11月まで飛島組により施工されました。完成した橋は「突桁式鉄筋混凝土丁型桁橋」と言われる形式で、長さ396.8m、幅員8m、鉄筋コンクリート造の堂々たる橋でした。橋の両岸のたもとに2基ずつ建つ親柱は花崗岩製で、高さ約4.85m、幅1mの大ききで上部側面に電灯の付く構造でした。また欄干の上部には花崗岩製の笠石を並べて乗せてありました。取付け道路は、稲城側417.49m、調布側1239.593m、幅員7.5mの工事が行われ、稲城側では多摩川原橋から南武線を越えて川崎街道までの取付道路が新設されました。

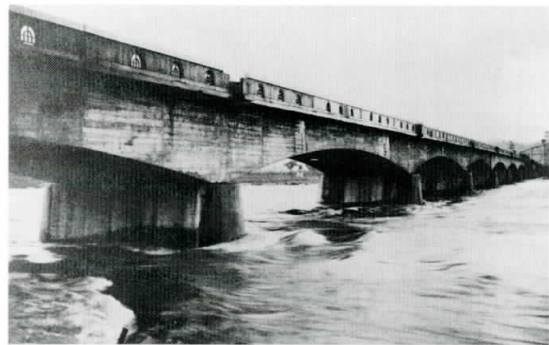
開通式は、昭和10（1935）年11月22日に調布側の橋のたもとで行われ、千名を超える人々が集まって、盛大に開催されました。来賓として内務大臣代理、東京府会議長、そして東京府知事横山助成、調布町長原雄一、稲城村長井西桑吉や調布稲城両町村の関係者などが参加しました。式典は、神官による奏楽と祝詞の奏上の後、式辞、工事報告、来賓祝辞と続き、東京府知事が紅白のテープをカットして、神官を先頭にして渡り初めが行われました。渡り初めには調布・稲城の町村民を代表して、親子三代の2組の家族が参加しました。稲城村側からは東長沼の篠崎家、調布町側からは土方家の親子三代が選ばれました。

多摩川原橋はその後、稲城と調布を結ぶ重要な永久橋として使われ続けましたが、平成11（1999）年に解体され、その後現在の新しい橋に架け替えが行われました。

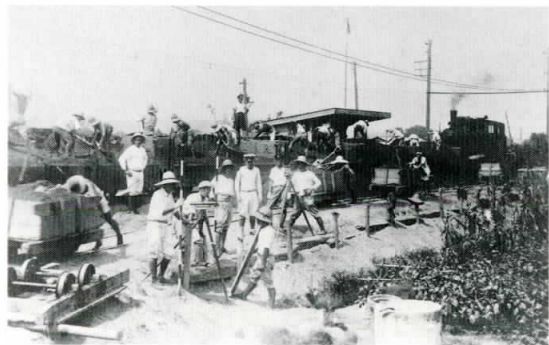
参考文献、『多摩川原橋工事概要』（東京府）、『稲城市文化財研究紀要第3号』（稲城市教育委員会）



東京府会への陳情書（昭和6年9月）



完成した多摩川原橋（昭和10年8月）



稲城側の取付道路工事
(昭和9年9月 小山静子氏提供)



開通式の渡り初めに参加した篠崎家の人々
(昭和10年11月 篠崎誠一氏提供)